

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：14202

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12347

研究課題名(和文)断乳ケアのエビデンスに関する研究

研究課題名(英文)The study on the evidence of weaning care

研究代表者

立岡 弓子(TATEOKA, YUMIKO)

滋賀医科大学・医学部・教授

研究者番号：70305499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：わが国で産婆時代から伝承的に行われてきた断乳時のセルフケア手技“圧迫法(おにぎり搾り)”の有効性を超音波画像診断を用いて乳腺の退縮所見から検証した。断乳する母親9名の乳腺腔の厚みを計測し、乳房痛と乳腺炎症状の変化を断乳前日から断乳後30日間まで縦断的に実施した。断乳開始後から乳腺腔の厚みと導管直径が退縮している画像が確認され、左乳房において断乳開始後の3日目、7日目、30日目で統計学的有意差を認めた。

乳腺腔の厚みの退縮画像より、圧迫法(おにぎり搾り)は乳頭刺激を回避することで催乳ホルモンの分泌なく乳汁産生を認めないこと、乳汁うっ滞が回避できることで乳腺の退縮に効果的であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

産婆時代から助産の臨床に伝承されてきた、断乳ケア方法である圧迫法(おにぎり搾り)について、断乳開始前から断乳30日目まで縦断的に、乳腺腔と導管の超音波画像による計測により、ケアの効果を検証できた。おにぎり搾りの手技は、乳房全体を圧迫し、乳腺内に停滞する乳汁を排乳できること、乳頭刺激を回避しているため催乳ホルモンが誘発されず乳汁産生が停止すること、乳汁うっ滞状態を改善し、乳房トラブルの発症を防ぐ方法であることが明らかとなった。

働く女性が増え断乳ケアを実施する母親は多い。本研究によりエビデンスが実証されたおにぎり搾りの手技を母乳哺育終了のセルフケア手技として、広く助産臨床の場に周知していきたい。

研究成果の概要(英文)：This study was to anatomically verify the efficacy of the traditional self-care technique used during discontinuation of breast-feeding, "onigirishibori", which has been handed down through generations since the days when midwives instead of doctors administered to births. The study participants were 9 mothers who had decided to discontinue breastfeeding. The thickness of the mammary cavity was measured by ultrasonography, and changes in breast pain and mastitis symptoms were measured longitudinally from the day before discontinuation of breastfeeding to 30 days after. The ultrasound images of the regression of the thickness of the mammary cavity revealed that, since "onigirishibori" avoids nipple stimulation, it did not cause secretion of the lactogenic hormone and therefore new lactogenesis was not observed and that the compression of the entire body of the breast and the drainage of stagnant milk in the milk ducts effectively affected the regression of the mammary gland.

研究分野：助産学

キーワード：断乳 乳房圧迫法 セルフケア

1. 研究開始当初の背景

近年、国内外で母乳哺育が推奨され、子どもの意思で母乳哺育を終了する「卒乳」が推奨されているが、女性のライフスタイルの変化から母親の意志で母乳哺育を終了する「断乳」を選択する母親は多い。産婆時代から助産臨床では様々な断乳ケア方法が伝承されているが、その有効性は検証されず、断乳時の乳房ケアは自宅で行われることから、母親自身のセルフケアに依存し、助産師のケアが行き届いていない現状がある。断乳時には催乳ホルモン(プロラクチン)の誘発しない方法で、乳汁うっ滞を改善し乳腺炎発症を防ぐ乳房ケアが必要である。以上のことから、催乳ホルモンの分泌を誘発しない乳房間質部への“圧迫法”に注目し、直接乳体部を圧迫して腺房腔に貯留した乳汁が乳管口から排乳する“圧迫法”をセルフケア方法として母親に介入し、乳房痛や乳腺炎の発症を予防するためのセルフケア手技の有効性を解剖学的に検証する研究に取り組むこととした。“圧迫法”は、“おにぎり搾り”とも呼ばれており、乳頭を刺激しないプロラクチン分泌を回避する方法であり、産婆時代から助産臨床では伝承的に行われてきた方法である。

2. 研究の目的

伝承的に行われてきた断乳時のセルフケア手技である“圧迫法”の有効性を、超音波画像診断による乳腺の退縮所見から解剖学的に検証する。

3. 研究の方法

本研究の研究デザインは、縦断的デザインによる観察研究である。20歳以上で出産後4か月以上自律授乳を継続して行い、断乳を意思決定し自宅への訪問調査が可能な母親10名に対し、断乳時のセルフケア手技である“圧迫法(おにぎり搾り)”と“用手搾乳法”を説明し、任意にて2群化した。断乳前に基本属性を調査し、超音波画像診断による乳腺腔の厚み・導管の直径を計測し、乳房ケアの実施状況、乳房痛と乳腺炎の評価を断乳前日から断乳30日目まで縦断的に行った。分析方法については統計パッケージソフトSPSSを用い、基本統計、unpaired t-test、相関分析を行った。

4. 研究成果

本研究対象者全員で、断乳開始後から乳腺腔の厚みと導管の直径ともに、経時的に退縮している画像が確認された。断乳前日からの乳腺腔の厚みの変化では、右乳房においては断乳30日目で統計学的有意差が認められ、左乳房では断乳開始後の4ポイント(断乳1日目、3日目、7日目、30日目)で統計学的有意差を認めた(unpaired t-test、 $p < 0.05$)。導管の直径では、両群とも断乳開始後徐々に縮小し、断乳30日目では消失所見を認めた。乳汁分泌状態については、用手搾乳群では左右乳房から乳汁分泌が持続していたが、圧迫法では右乳房で乳汁分泌が完全に停止していた。乳房緊満状態は、断乳開始後、両群ともに断乳3日目をピークに軽減しており、本研究中に乳腺炎を発症したものはなかった。

超音波画像で得られた乳腺腔の厚みの変化と導管の退縮画像より、圧迫法(おにぎり搾り)は乳頭刺激を回避しているため催乳ホルモンの分泌が起こらず新たな乳汁産生は誘発されていないこと、乳体部全体を圧迫し乳管内に停滞する乳汁を排乳することで、乳管内の乳汁うっ滞を起こすことなく乳腺の退縮に効果的に作用することが明らかとなった。圧迫法は左乳房においてより効果的であり、右利きの場合に右乳房乳体部に効果的な圧力が加えられずセルフケアが不十分であることが、乳腺の退縮所見から乳汁停滞と関係があるこ

とが示唆された。したがって、断乳時の乳房ケア方法として圧迫法を推奨する際には、右乳房のケアが不十分にならないよう助産師の介入が必要であることが明らかとなった。

産婆時代から助産臨床の場に伝承されてきた、断乳ケア方法である圧迫法(おにぎり搾り)について、乳管内の乳汁停滞をできるだけ起こすことなく乳汁産生を終了させ、乳房トラブルの発生を防ぎ、乳腺の退縮と脂肪細胞を再構築させる効果が検証できた。断乳時の乳房ケアについて、助産学分野に新たな知見を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	和多田 抄子 (watada shoko) (60763266)	滋賀医科大学・医学部・助教 (14202)	
研究分担者	土川 祥(山下祥) (tsuchikawa sachi) (40534201)	滋賀医科大学・医学部・講師 (14202)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	館下 麻美 (tachishita mami) (50906146)	滋賀医科大学・医学部・助教 (14202)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関